

業務実績に関する評価意見【全体評価】

【令和 2 年度業務実績に関する評価について】

(全般的事項、特筆すべき成果、今後に対する意見等)

■花泉委員長

【特筆すべき成果】

⑩令和 4 年度からの学科再編にこぎ着けたこと、及び ⑪これに対応して共通テストの使用科目のうち理科を 2 科目に増やす等の入試改革を行ったことは特筆すべき成果として挙げられる と考える。

【今後に対する意見】

- ・ ⑭入試制度の変更に対しては、その効果の検証が必要である。
- ・ ⑲学部再編に続き、大学院のカリキュラム再編も確実に進めて欲しい。
- ・ ⑳国際交流及び地域貢献事業については、コロナ禍を前提とした計画を立てた上で、その確実な履行が望まれる。

■後藤委員

①令和 2 年度は新型コロナ感染拡大により、通常の対面授業の実施ができない状況からスタートしました。この報告書には、新型コロナ感染拡大に特化した対応についての記述はありませんが、6 学科ある工学部では、実験・実習の授業も多く、コロナ禍で授業を実施する対応は、多くの苦労があったはずですが、この様な状況であっても、業務実績の自己評価で計画数 87 のうち、A 評価が 3 (3.4%)、B 評価が 80 (92%)、C 評価が 4 (4.6%) であったことは、大学の学びを止めないための努力の結果であり、評価できます。

また、⑥C 評価のうちの 3 つは新型コロナ感染拡大の影響により、やむを得ず中止や未実施となったものです。⑰もう一つの C 評価の項目は、学部から博士前期課程の教育的連携であり、R4 年度の学部の学科再編を伴うカリキュラム編成を優先し、大学院のカリキュラム再編には至りませんでした。しかし、R3 年度後期から学部 4 年次の大学院科目早期履修制度の開始を決定しており、カリキュラム再編の遅れは最小限に留められたと考えられます。

特筆すべき成果 (A 評価) の一つに、入試改革の実施があります。⑫共通テストの使用科目で理科を 2 科目に増やすなど、アドミッションポリシーに沿った入学者選抜を実施することができたことは評価できます。一方で、⑳志願者数・受験者数は前年度に比べて減少しており、学生の退学率の減少につながるかなど、適切な入試改革であったかどうかの検証を継続していく必要があると考えます。

自己評価では B 評価でしたが、㉑大学院への内部進学者の増加をあげることが

できます。大学院への内部進学者数は前年度に比べ倍増しています。卒業生を招聘した広報活動等の効果を検証し、継続して内部進学者増につなげられることを期待します。加えて、⑳博士後期課程の学生に対し、分野横断型シンポジウムで40分発表し学長からの講評を受ける機会を設けたことは、中期計画数値目標である博士学位取得者数15人以上の達成につながる取組の一つとして評価できます。

㉑研究に関する計画では、外部に委託した科学研究費助成事業支援は、採択につながる成果が出ていないため、R3年度に行われる3年間の効果検証の結果を注視したいと考えます。

㉒地域貢献に関する計画では、コロナ禍で学校以外での学びの機会が減少した子供たちに対し、こども科学教室を動画配信し、3000回に迫る視聴があったことは評価できます。

㉓中期期計画数値目標の達成状況を見ると、中期計画で目標を達成するための具体的手立てが明確になっていないものが散見されるため、年度計画の中で明示していくことを期待したいと考えます。

■伊藤委員

(全体的事項)

㉔年度計画と実績を検討した結果、全体として、概ね適正に評価が行われていると判断します。

その中で、全体の95%以上の項目がA評価又はB評価となっており、年度計画を着実に実行できていると思います。

(特筆すべき成果)

A評価となっている項目はいずれも特筆すべき項目であると考えます。

その中でも、㉕<No.81: 教室整備等による学習環境の向上>に関しては、計画の実施手段として、遮光フィルムの設置による比較検証を卒業研究の一環として実施したことや、教室整備に関する調査やそれに基づく整備計画の策定を学生の研究題材として行い報告書としてまとめていることは、大学の特色を生かした取組として、高く評価できる成果と考えます。

また、㉖前年度末から引き続き新型コロナウイルスの流行が続いている中で、計画を思うように実施できない項目も見受けられましたが、多くの項目で従来とは様式を変えた代替手段での対応に変更することにより計画を実行されている点は、評価に値すると思います。

(今後に対する意見等)

㉗来期は中期計画3年目ということで、計画(例えば、入試改革、英語教育に対する取組みなど)に対する効果や問題点もより具体的に確認できてくる時期かと思しますので、効果の記載や問題点に対する対応策等の具体的な記載が行われるとより良いかと思えます。

■梶委員

③全般的に中期計画・年度計画を積極的に実施し、成果も出ていて、大いに評価できる。

特に評価できる点として、

1、大学の質を上げるには学生の質を上げなければならず、NO.6とNO.8はこの取り組みとして大いに評価できる。ただし、将来は入学前教育を行わずとも十分基礎学力のある学生を入れられることが望ましい。

NO.6

⑬共通テストの使用科目の理科を2科目に増やし、理系の基礎学力のあるものを入学させて、大学の質を向上させる取り組みをしたこと。

⑰NO.8 特別選抜・推薦入学合格者に入学前教育として、理系の基本教育を行い、基礎学力の向上に取り組んだこと。

2、⑳NO.26・NO.27・NO.28・NO.32はコロナ禍にあっても、地域貢献である大人向け講座や子供向け科学教室をZOOMや動画配信で継続実施したことは大いに評価できる。より魅力ある講座・教室としてほしい。

3、㉑NO.70・NO.71・NO.72はインターネット上のコミュニケーションツールを利用して、積極的に大学の情報を発信していて、大いに評価できる。

今後は、特徴的な活動や研究成果を出せるようにして、記事としてマスコミに取り上げられるように働きかけ、さらに知名度の向上を目指してはと思う。

■川住委員

・④AB評価が全体の約95%にのぼり、全体としては計画通りに進められていると考える。

・A評価となっている⑯NO80、81は、学生の実践的な研究により学修環境を向上させたものであり、学修環境そのものの向上という点のほか、学生が実践的な研究を行う場を提供できたという点においても高く評価できると考える。是非とも、今後も同様の取り組みを継続していただきたい。

・C評価となっている⑱NO10は、学部のカリキュラム編成に先行して着手し、後に大学院のカリキュラム編成に着手するという考えによるものであり、リソースが限られることからすれば十分に理解できる選択である。

・C評価となっている㉒NO29、34、35は、新型コロナウイルスの影響により計画通りに実施出来なかったものであり、やむを得ないものとする。

・NO6、14については、前年度に比べて入試志願者が大幅に減少していること、入学者の中間考査の結果等を総合的に考慮し、⑮適切な入試体制になっているかを慎重に考慮する必要があると考える。

■高山委員

1. A評価とされた項目について

- ① 年度計画No.6：入試科目の変更や配点の見直しについての評価は、入学した学生の学修状況など、ある程度の長期的な分析が必要であり、導入年度においては志願者数や受験倍率などへの効果の検証にとどまるのではないかと懸念がある。②1 A評価とする根拠がほしい。
- ② ③5年度計画No.80：遮光フィルム設置により、建物・設備の省エネ効果が検証できており、A評価は適切と思う。
- ③ 年度計画No.81：3つの実績のうち、大教室のホワイトボード2段化について②2これがA評価の根拠となることの説明がほしい。

2. C評価とされた項目について、

- ① 年度計画No.10：年度計画においては、大学院のカリキュラム再編に「着手する」とあるが、実績としては「カリキュラム再編に至れなかった」としている。②3年度計画における「着手」は、どこまでを視野に入れていたのか。再編を目標にしていたのであればC評価は妥当であるが、「着手」の意味がわかりにくい。
- ② 年度計画No.29・34・35：⑧地域貢献・国際交流に関しては、コロナウイルスの影響によって中止されたので、C評価はやむを得ないであろう。代替措置として、オンラインによる対応がなされていれば、B評価となったであろう。

3. B評価とされた項目について

- ⑤その他のB評価の項目については、おおむね適切と思います。